

内容重視の批判的言語教育(CCBI)とは何か

批判的言語教育国際シンポジウム
 未来を創ることばの教育をめざして
 内容重視の批判的言語教育(CCBI)とその後
 6月30日(土) 7月1日(日)
 プリンストン大学
 佐藤慎司
 ssato@princeton.edu

今日のトーク

1. CCBIのきっかけ：日本語コースの位置付け
2. 内容重視の言語教育(CBI)とは？
3. 教育とは？批判的（クリティカル）とは？
4. 内容重視の批判的言語教育(CCBI)とは？
5. 言語、内容、クリティカルのバランス
6. CCBIを成功させるには？
7. むすび

CCBIのきっかけ（佐藤）： 日本語コースの位置付け

大学内の位置付け（アメリカ）
 地域研究学部の言語コースとコンテンツコース

- コンテントコース
 - 文学や歴史のクラスなど

→内容重視の言語教育(CBI: Content-based Instruction)に出会う
 • 内容とは？→定義はさまざま

内容重視の言語教育（CBI）の定義

- 「言語」と「内容」を統合する
 Brinton, Snow, & Wesche (1989)
 - 大学の科目と第二外国語のスキルを同時に教えること
 Stryker & Leaver (1997)
 - 学習者が羽を広げ、巣を離れ、地平線に向かって高く舞っていくことである
 - 「自律的」な学習者になること
 - 学習者に対するエンパワメント
- 目的、目標もさまざまだが、CBIは**教育活動**である

教育とは？

- 『ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること』
- 『知識の啓発、技能の教授、人間性の涵養(かんよう)などを図り、その人のもつ能力を伸ばそうと試みること』

→「望ましき」「よき」とは、だれにとっての「望ましき」「よき」なのか？
 →だれがどの方向にどんな状況で、ある人のもつ能力を、「伸ばす」ことができるのか？
 →どうやって（どの時点で）能力が**伸びた**と判断できるのか？

村井実『もう一つの教育』(1984)

- 教師にとっての教育という仕事はパラドックス。教えこまないわけには、身につけさせないわけには、その意味で囲い込まないわけにはいかない、でも、同時にその囲いを超えてさらによく生きる働きを育てなければいけない。この仕事を成し遂げるには、教師自身が「この世界」だけでなく「もう一つの世界」が自分にとってあることに気がついていること、子供達にとっても当然それがありうること、したがって、子どもたちの生活はいつもそこに向かって開かれていなければならないことを心得ていることが必要である



批判的（クリティカル）とは？

- 合理的思考、内省的思考、ジェネリック（汎用的）スキル（楠見先生基調講演）
- 「探求的、懐疑的、合理的、論理的、広い視野を持った、公平な、知的で柔軟性がある」（鈴木・竹前・大井 2006）。

弱クリティカル

- テキストや議論の論理性を分析するもの
- 批判的思考力やクリティカルな読み

強クリティカル

- クリティカルペダゴジー

内容重視の批判的言語教育(CCBI)

= 「言語」 + 「内容」 + 「強クリティカル」

CCBIのクリティカル

- **当然とされている現状を問い直し**、その根底にある前提、価値観などを考察
- **現状（自分、社会、コミュニティの未来）に能動的に関わる**

言語：外国語教育への疑問

言語教育の2つの側面

1. 標準語を教える・学ぶ
 - 目標は標準語をマスターすること（かなり明確）
 - **言語を「混ぜる」ことへの拒否感、嫌悪感**
2. 世界市民を育成する（外国語必須の理由？）
 - 目標は？
 - ことばって何？
 - 実際のコミュニケーションは？（お互いのリソースを最大限にいかす = **言語が「混ぜられている」**）（Pennycook & Otsuji 2015, 久保田 2017）

内容：議論の多いトピックを扱ったディスカッションの場で気をつけること
Kubota & Miller (2017)

1. セーフスペース（安全な場）、学びの場を提供
2. いろいろな見方を推奨することで、**専門家の知識がないと思わぬ方向に議論がいつてしまう可能性**
3. 謙虚さ(Humility)と文脈への感受性(contextual sensitivity)

クリティカル

弱クリティカル：批判的思考（楠見先生の基調講演）

- スキルを明示
- 態度も育成
- ふりかえりをし、身についているかチェック
- 転移できるように

強クリティカル：クリティカルペダゴジー

- **問題解決のために（どの程度まで）関わることを推奨すべきか？**

CCBIを成功させるヒント（佐藤の見解）

学習者、同僚（考え方の違う同僚、コンテンツコースの先生、学部長など）、コミュニティを巻き込む（まなびあう!）

1. **外国語学習、外国語教育、日本語教室にかかわるイデオロギーのもみほぐし（ゆっくりと...）**
 - 外国語の授業では
 - 教科書を用いるべきだ、文法を教えるべきだ
 - 評価は教師がするべきだ
 - などの「〜べき」をいっしょに考えていく
2. **成果をみせる（=かかわる。いろんなところで、多いほうがいい...）**
 - OPI、CEFRなど既存のスケール・テストなどを用いる
 - 内容言語統合型学習（CLIL）の4 C?
 - 研究成果（質的研究、量的研究）として発表、論文化する
 - コミュニティとの関わりなどをさまざまな形で広く公開 など

むすび

だれが何をめざすのか？（佐藤の見解）

1. ファシリテーター（教員など）が

- そこにいる参加者（学習者など）が批判的な眼差しをオンにし磨きをかけ、現状を分析できるように

2. （学習者や外国人だけでなくときには教員をも含む） 当該コミュニティが

- 批判的な眼差しで現状を分析し、それを踏まえ
- 共にコミュニティの未来を創造していく

→「外国人」や学習者だけでなく、**ファシリテーター（教師など）コミュニティも、批判的な眼差しに磨きをかけ、自らも変わる覚悟が必要**